# 中世の朴坂越（二俣越）を探る・緒

１７期　塩谷　忠士

## １．はじめに

天正 12 年（1584）羽柴秀吉の天下へ大局が動く中で、越中の佐々成政は戦局的不利を覆そうと加賀や能登へと攻め込み、能登と加賀二郡の領主前田利家に敵対しました。成政は国境を跨ぐ峠道を次々と占拠し、重要な往来では峠道を付け替えて城の防御力を高めました。これまで私は加賀と越中の国境の城（加越国境城跡群）と峠道に関していくつか寄稿をしてきました。今回は越中砺波郡南部から金沢への最短コースであった朴坂越の中世の姿を探りながら、成政が改修した荒山城を再び考察します。

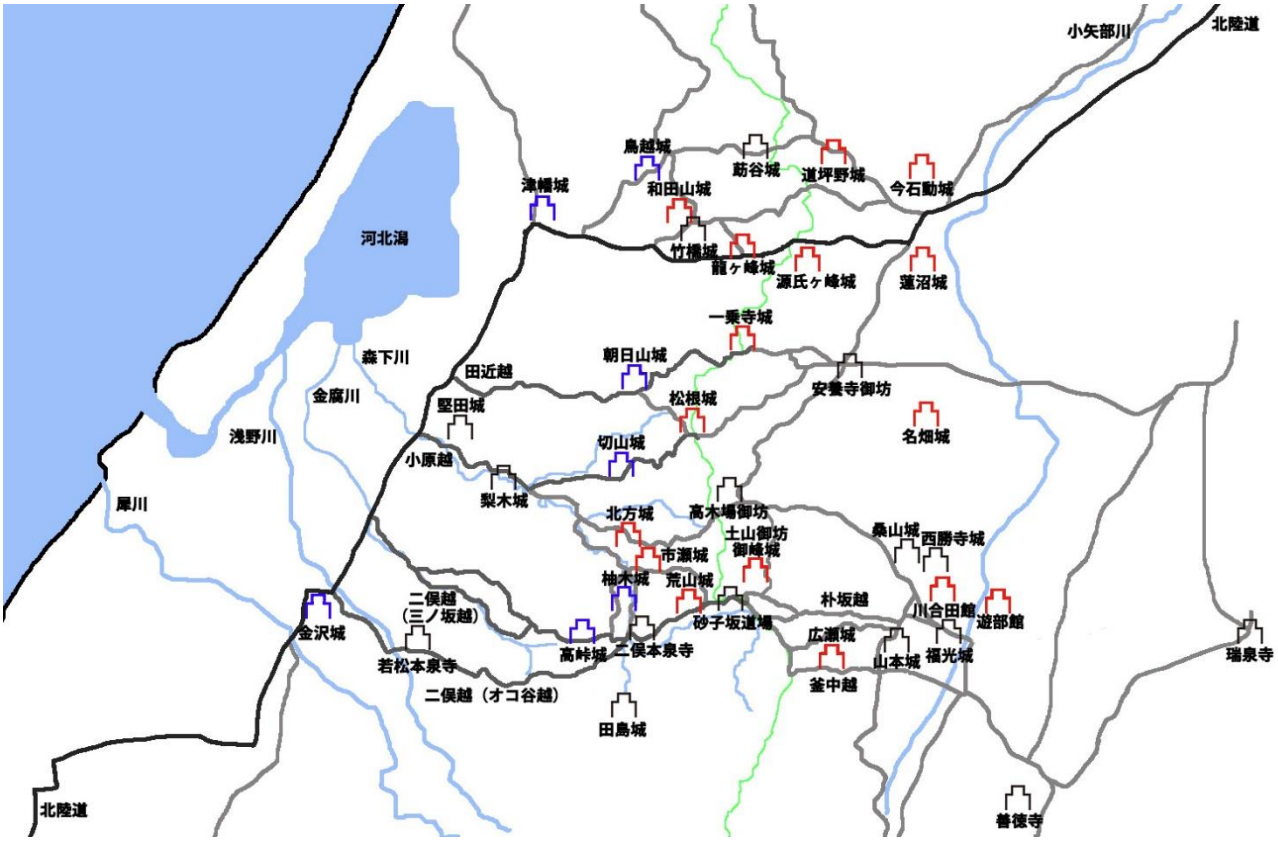
知りたいことをまとめると以下３点になります。

1　朴坂越の範囲とルートの時代変遷を探る。

2　二俣と越中をつなぐ朴坂越と釜中越の分岐（合流）地点を探る。

3　砂子坂道場を通るのは釜中越なのかを特定し、それにより戦国天正期の砂子坂道場の役割を探る。

## ２．加越国境の往来（改訂）




上に示したのは加賀と越中をつなぐ主な往来を示した地図になります。きくざくら第 32 号において、二俣村から越中に至る道筋は荒山城を経由して小又村に至る朴坂越とその南側を荒山村、砂子坂村を経由して砂子坂道場に至る釜中越の２本の往来を想定し、荒山城を背後（東の越中側）から奇襲できる往来として釜中越を描きました。ですが「柚木城と三ノ坂道」によれば、釜中越は国境辺りで分岐する道であり、別に二俣村から直江谷を北上して市瀬村を経由する間道が荒山城東側の朴坂越につながること

が分かりました。同書に関連した調査で間道上の市瀬村に城跡（市瀬城）が発見され、直江谷を流れる森下川の右岸（越中側）に南から荒山城、市瀬城、北方城と拠点を構え、北へ松根城、一乗寺城、龍ヶ峰城と国境の往来を漏れなく抑えた成政の戦略的な防衛ラインが浮かび上がってきました。

「医王が語る」によれば、金沢城下町に近い医王山周辺の主な往来は北から二俣村を通る朴坂越と釜中越、医王山核心部を通る白兀越、湯涌谷を通るかっ坂越と横根越、刀利越の６本がありました。同書には、「田の島の古老がかつて福光へ越えるのに村の裏から西尾を登り、白兀頂上から鳶岩方向に進んで三蛇が滝上流の松尾谷へ下り、谷をすこし下って梯子坂を登り返して祖谷へ下りた」という話が載っています。戦前の村人が登り下りをさほど気にせずに歩行距離で近い道を選んでいたとするならば、中世の人々は尚更そうであったと思われます。それゆえに成政が官道の北陸道だけでなく峠道も同等に重要視していたことが城の配置からもうかがえます。

## ３．二俣越（朴坂越・釜中越）名称考

峠道の名称は、同国内であれば道中で最も標高が高い峠の名称、国境を跨ぐのであれば国境の峠の名称または国境に向かう坂の名称が一般的と思います。二俣越を例に考えると、越中国内では最高標高の朴坂峠の名称を用いて「ほうさかごえ」または「ほうのきさかごえ」と呼ばれています。釜中越でも最高標高笠取山（530m）付近にあった鎌中峠（図Ⅰ⑧）が名称の由来とされます。一方、加賀国内では田近越は田近郷を通るから、小原越は小原谷を通るから、二俣越は二俣村が分岐する往来の基点となるからなど峠や坂に由来しない名称が多く使用されます。

しかし、峠道は山中を縦横に間道がつながり、その行程を他人に説明する上でも分岐間の往来には通称名があったと考えています。近世の二俣越の場合、若松村から二俣村まではオコ谷越（オコ谷往来）、御所村から二俣村までは三ノ坂越（三ノ坂往来）、二俣村から坂本村までは朴坂越（朴坂往来）、朴坂越分岐地点から広瀬舘村までは釜中越（釜中往来）ということになるでしょうか。

時を遡れば蓮如上人が北陸で布教していた頃、金沢から城端へ使用された道は若松本泉寺、二俣本泉寺、砂子坂道場、井波瑞泉寺を結ぶオコ谷越と釜中越であったと考えられます。一向一揆に敵対していた石黒氏の本拠である福光村を通らない利点もあるが、福光村を経由するよりも広瀬舘村へ下りるほうが城端・井波までの最短ルートとして当時の人々にとって当たり前の選択であったのかもしれません。よって、その頃若松村から二俣村まではオコ谷越、二俣村から広瀬舘村までは釜中越と人々が呼び、朴坂越は釜中越から分岐する間道であったと推測しています。近世に入り加賀と越中がともに前田氏の支配下となり、砺波郡の年貢を金沢へ運ぶようになると朴坂越がより多く利用されるようになり、分岐地点から二俣村までは釜中越から朴坂越に含まれるように人々の認識が変わったと考えている。今に伝えられる名称は城跡の縄張が最終形のものであるのと同様に、時代とともに往来の名称にも変遷があったとしても何ら不思議はないと考えています。二俣越という名称には複数の主要道があったこの往来への人々の認識の曖昧さを反映しているのかもしれません。

## ４．殿様道を歩く

朴坂越を人々の記憶に留めたのは 13 代前田斉泰でした。安政 3 年（1856）斉泰は総勢 1830 名程のお供を従え江戸から金沢への帰国に際し、高岡から倶利伽羅峠（北陸道）を越えるところを城端に向かい、宿泊した翌日に福光の宇佐八幡宮に参拝して朴坂峠を越えている。これ以降、越中の人々は朴坂越を「殿様道」と呼び、斉泰が小休した朴坂峠（御小休場）と峠からの眺望を後世に語り伝えてきました。斉泰は二俣村の本泉寺で中休をとった際、御料紙となっている大奉書紙・大杉原紙の漉立から紙を板に張る

干場までの製法を視察し、三ノ坂越で北陸道へと出ている。令和元年 10 月に文化庁が定める「歴史の道百選」に田近越・小原越とともに選定された二俣越は、斉泰が通った坂本から御所までの道筋が認定されています。

斉泰の御小休場（朴坂峠）から見る砺波平野と立山連峰（図Ⅰ③）

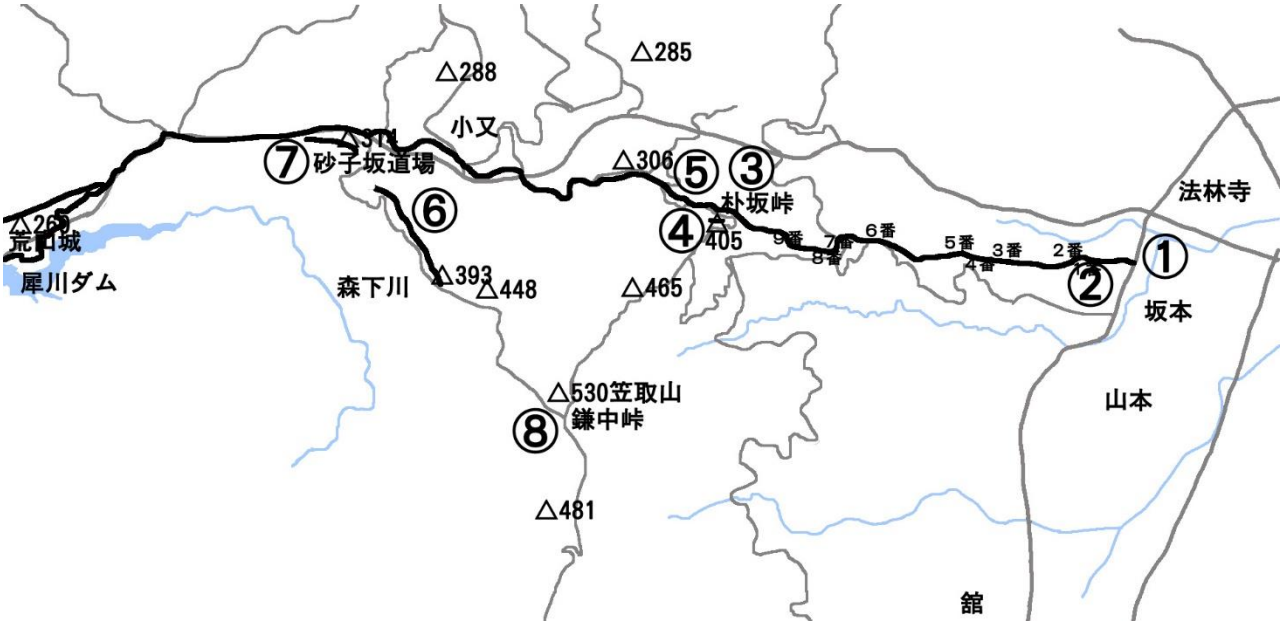
この朴坂越には十村の和泉村石崎市右衛門（7 代）が文政（1818-1829）の頃、病気を苦にして小矢部川に身投げした一人娘の供養のために、坂本村から二俣村までの道筋に西国三十三番札所の観音石仏３３体を安置したと伝えられています。このことから当時の人々は坂本村から国境を越えて二俣村までを１本の往来として認識していたことが分かります。調べているとその観音石仏が今も坂本から朴坂峠までの道筋に一番から九番まで欠けずに祀られていると知りました。

草枯れの時期を待って、昨年 12 月待望の秋晴れのなか殿様道を歩いてきました。東麓の道路沿いに建てられた殿様道の標柱（図Ⅰ①）から朴坂峠を目指して坂を登ると墓地の入口に朴坂越（南砺市指定史跡）の案内板があり、その墓地を抜けて舗装されていない峠道に入ると左手に一番観音が祀られていました。そこから旧状を残す峠道と言われる道となるのですが、往時の峠道としては若干違和感があり森林作業道として造成された後の形が大部分を占めると感じました。途中明らかに作業道を付け替えて旧道がわずかに残る場所があり、道筋の尾根に高圧鉄塔を建てるに当たり付け替えが疑われる場所もありました。私は斉泰が通った頃の峠道の風景を期待していただけに少し残念な思いがしました。

坂本の朴坂越（殿様道）起点（図Ⅰ①東から撮影）朴坂越（殿様道）の一番観音（図Ⅰ②）

朴坂越は越中側・加賀側ともに元々泥質の坂道が続く悪路で、峠を避けて労力の少ない脇道を作る計

画が明暦 2 年（1656）、宝暦 2 年（1708）、明治 2 年（1869）と何度も持ち上がって消えている。実作業の残る記録としては、文政 12 年（1829）に先述の十村石崎市右衛門の願い出により、川合田村織田與三左衛門が頭取となって道を二間（約 3.6m）幅にひろげ、石畳を敷くなどして難所を少なくする工事が行なわれた。堀切状の二間幅の峠道が確認できたのは、朴坂峠（図Ⅰ③）を過ぎ小又へ下る舗装された道路（百万石道路）脇の旧道（図Ⅰ⑤）と、砂子坂道場に沿う旧道（図Ⅰ⑦）の２ヵ所。明治 19 年（1886）11 月、福光金沢間で馬車が通行できる高窪越往来（ほぼ現在の 304 号線）が完成して人の流れが変わり、明治 44 年金沢第九師団の兵馬や車両が立野ケ原演習場に向かって行軍するために二俣福光間に新道（兵隊新道）が開かれると、重なる一部は新道に置き替えられて朴坂越は廃道となったため文政期の正確なルートもはっきりとは分かっていません。




図Ⅰ. 観音石仏が残る朴坂越の道筋と旧状を残す峠道等分布

## ５．朴坂越と釜中越の分岐地点はどこ？

国境にある砂子坂道場は、近くに朴坂越と釜中越の分岐（合流）地点があったと考えられる交通の要衝に占地している。しかし、二俣越や砂子坂道場に関する調査報告書ではその分岐地点の場所が異なっていて今も曖昧な状況になっています。天正期の成政の国境越え往来の占拠戦略を考える時、国境にあり往来の分岐地点でもあった砂子坂道場跡が使用された伝承が残っていないことが前から気になっていました。砂子坂道場西側の光徳寺跡の北側尾根筋を通る堀切状の峠道（図Ⅰ⑦）は部分的には二間程あり、ここが戦国期の旧状を留めている釜中越なのか、文政 12 年工事で広げられた朴坂越なのかによって砂子坂道場の重要性も大きく変わり、次の論点に進めると考えています。二俣越で成政の伝承が残る城を整理すると、荒山城を最前線として、後詰めとしての御峰城（土山村）の２城あり、加えて成政に加勢していた勢力として清水将監の広瀬城（釜中越）、川合田館や遊部館を拠点としていた雑賀氏ら越中一向一揆が挙げられる。それでは砂子坂道場跡は？

今に残る近世の絵図で分岐地点を調べると、正保 4 年（1647）「加越能三箇国絵図」でははっきりと道筋を描いておらず、天保 10 年（1840）「加越能一町五厘略絵図」では法林寺村と坂本村の間から朴坂越が始まり、小又村、土山村、能美新村を通って国境を成す尾根筋の高窪村からの峠道と合流して加賀国に入ってから釜中越と合流している。これらの絵図は村を基準にして村間をつなぐ往来を描くことが

主目的と考えられ省略された往来が存在するのかもしれません。当時の往来を測量した記録で最も信用できる史料として、石黒信由の文政２年（1819）「三州測量図籍　砺波郡上」があり、これには朴坂越は小又村を過ぎて茶屋で北の土山村と西の国境に分岐し、茶屋と国境の中程で釜中越と合流している。この釜中越が光徳寺跡の北側尾根道（図Ⅰ⑦）を指すのか、さらに東側の道であるのかは判然としない。

峠道の現状から戦国期の往来の有り様を考える。砂子坂道場（図Ⅰ⑦）や荒山城から医王ダムまで（図Ⅰ⑨⑩）に残る旧状の峠道はいずれも堀切状の道であり、尾根筋を利用する尾根道である。先述の「三州測量図籍　砺波郡上」に記す朴坂越から高窪村への往来は国境を成す北へ延びる尾根筋を利用した尾根道であり、さらに戦国期の釜中越も国境からは南へ延びる国境を成す尾根道であったことは疑いようもない。そもそも峠道を設計するときの要件とは何であるのか。それは一に進む方向に迷わず、二に一度整備したら現状が長く続くこと、土崩れや倒木によるメンテナンスが最小限で済むことと考える。尾根筋以外の方角を容易に見渡せる尾根は進める方向がわかりやすく、上部から土砂が崩れて埋まる危険性は少ない。北国では冬場の北風が強く、それを和らげるために砦の北側に風除けの土塁を築くことがあり、同じ目的で堀切状にして風除けをした峠道を多く見知っている。

砂子坂道場の堀切状の峠道（図Ⅰ⑦東から撮影）

釜中越の峠道（図Ⅰ⑥北から撮影）

私が殿様道を歩いた時、今ひとつ腑に落ちないことがありました。小又までの最高地点である朴坂峠（御小休場、図Ⅰ③）のすぐ南側には高圧鉄塔が建つ尾根があり、土崩れの危険性がある中腹斜面を道が通るのは何故なのか。朴坂峠を西の小又へ下る舗装された道路（百万石道路）脇には堀切状の旧道（図Ⅰ⑤）が残されていて上りから下りに変化する地点に違いはないが、元々朴坂峠はこの場所なのかと。そこで百万石道路を少し上って高圧鉄塔の尾根続きでもある三角点地点（405m、図Ⅰ④）に登ってみた。すると三角点の北直下に尾根筋に沿う東西方向の堀切状の峠道を発見しました。

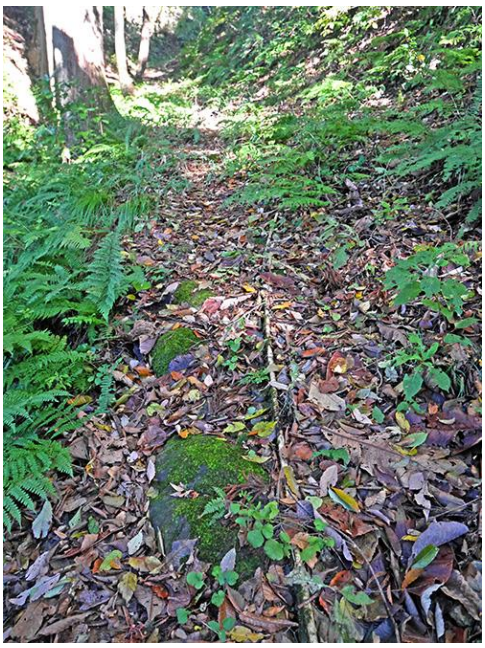
道幅が狭く戦国期以前と思われる峠道で中世の朴坂越を解き明かす鍵になると思いましたが、雑木や笹に覆われた道跡はどこまで続くのかもわからず、時間も体力も続かないと考えてその日の調査は中断しました。この道は東へは高圧鉄塔の尾根筋を今の朴坂越につながり、西はどこにつながっているのか。小又に下るのか、尾根筋を南西方向に鎌中峠に上るのか、それとも砂子坂道場につながっているのか、いずれにせよ戦国期の朴坂越の解明につながるのではないかと考えています。

三角点直下の旧状の峠道（図Ⅰ④南から撮影）

堀切状の峠道（図Ⅰ④東から撮影）

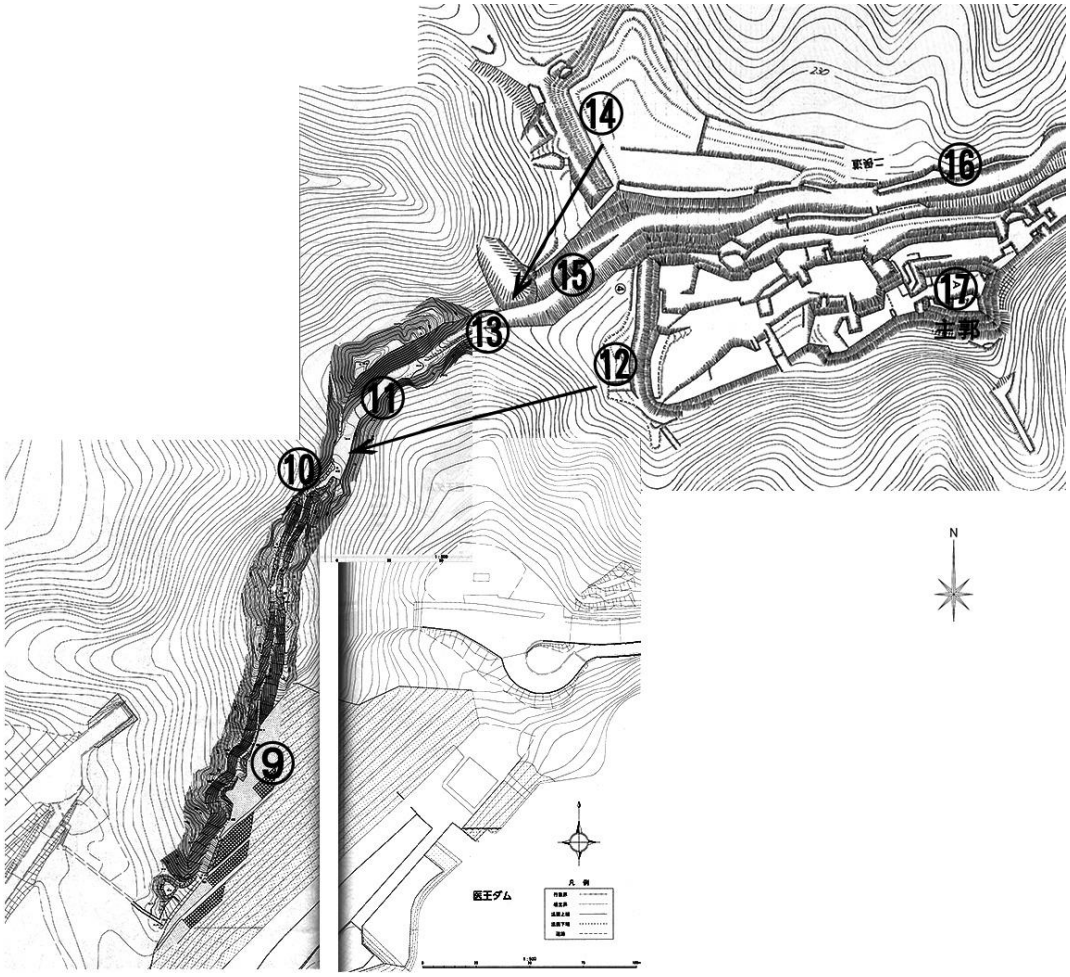
## ６．荒山城と朴坂越再考

殿様道を歩いたのとは別日に荒山城の西側に続いている朴坂越を医王ダムまで歩きました。朴坂越は荒山城の城域内では尾根筋に造られた曲輪群の北裾（図Ⅱ⑯）を通りますが、土崩れの危険性を伴う斜面中腹にあり往来の北側に風除けとなるものがないことから造成時の峠道の道筋ではないと考えています。曲輪に挟まれた坂道（図Ⅱ⑮）より東側は森林作業道として改変されて旧状を留めていないことが考えられるものの、成政が荒山城の改修により付け替えた道筋が今に残っていると推測しています。坂道に石畳が一部残されているということは聞いていましたが、これまでゆかるみや下草で視認状態が悪く本当にあるのか分かりませんでした。今回、石畳というより突き固めた道が崩れないように道端を支えたと思われる石列（図Ⅱ⑬⑮）を確認し、坂道より西側は斉泰も通った近世の姿を留めていることがわかりました。下草に覆われているものの平坦な道（図Ⅱ⑪）が約１００m続いています。城域内の道（図Ⅱ⑯）と異なるのは北側に尾根の削り残しが風除けとなっていることです。さらに進むと堀切状の坂道（図Ⅱ⑩）となり、旧状の峠道が医王ダム北側の擁壁まで続いていました。そこから先は医王ダムや新道の造成により消滅しています。



下り坂の石列（図Ⅱ⑮西から撮影）

医王ダムから上る堀切状の峠道（図Ⅱ⑨南から撮影）




図Ⅱ.「加賀中世城郭図面集」（佐伯哲也氏）の縄張図の一部に「加賀一向一揆関連遺跡と古道調査報告書」の朴坂越を合わせた図に番号などを加筆する

北側に尾根を削り残した平坦な道（図Ⅱ⑪東から）　平坦な道へ出る堀切状の峠道（図Ⅱ⑩東から）

今もわずかに残る旧状を伝える峠道（医王ダムから上る坂道（図Ⅱ⑨）、砂子坂道場から鎌中峠への峠道（図Ⅰ⑥⑦）、朴坂峠近くの三角点地点（図Ⅰ④））はいずれも尾根筋を利用した堀切状の道である。私は蓮如上人時代の釜中越は二俣村から大部分が尾根筋を利用した堀切状の道であったと考えている。二俣村から国境まで急な上り坂が続く峠道は荒山城辺りで一旦緩やかなピーク（図Ⅱ⑰）を形成している。二俣村から登ってくる敵軍に対して守りやすい地形で、成政にとっては是非にも手に入れたい場所

であった。成政はピーク（図Ⅱ⑰）に主郭を造成して西側の尾根筋に曲輪を設け、尾根を通っていた峠道を低い位置に付け替えたと考えている。西に続く平坦な道（図Ⅱ⑪）は北側に尾根の一部が残されていることから今よりも長く尾根に堀切状の道が続いていたと推測している。成政は二俣村から進攻する利家軍をいち早く視認できるようにして鉄砲や弓矢をいかけ（図Ⅱ⑫から⑩）、数を減らした上で追撃する（図Ⅱ⑭から⑬）ために尾根道を尾根ごと削って現状の平坦な道（図Ⅱ⑪）へと変えた、そのことも荒山城改修計画に含まれていたと考えています。

## ７．終わりに

私の興味は、なぜそこに城が築かれたのかという立地や築城者の意図・戦略の考察から、かつて人が住んだ集落やそれをつなぐ往来・峠道の調査へと広がっている。今回取り上げた朴坂越だけでなく、小原越、田近越、湯涌谷から横根峠を越える３本の往来、津幡町の奥山峠を越える往来や笠野盆地を通る往来、能越国境の荒山峠を越える往来に石動山七口と呼ばれた石動山登拝道など、人々が行き交い山城が築かれた往来・峠道への興味は尽きません。朴坂越は石川県道・富山県道 27 号金沢井波線と医王ダムの建設により失われた部分も多いが、旧状が残る場所を訪れて戦国天正期より前の峠道の姿を探りました。今回発見した朴坂峠近くの道がどこへ続いているのか引き続き調査したいと思います。

殿様道を歩いたのは 12 月で御小休場から見えた青空に映える白銀の立山連峰が忘れられません。麓から１時間以上歩いてようやくたどり着いた場所でしたが、実は西の百万石道路から歩くと数分でたどり着く場所です。斉泰が江戸を出発したのは４月であり殿様が見た立山連峰もまた雪に覆われた姿であったと想像します。これを機会に興味を持たれた方は殿様が見た風景を共有してください。整備された殿様道ではイノシシもまた闊歩しているので熊鈴はお忘れなく。

最後に元旦の能登半島地震で能登を中心に多くの城跡や文化財が被害を受けました。奥能登に関してはいまだに被害調査も進んでいません。特に山城はすべてが文化財指定されているわけでなく、生活復旧の過程で知らずに破壊されてしまうかもしれません。そのまま残されたとしても時間が経過すれば土砂崩れと人工的な堀は区別できなくなることも考えられます。しかし、その時その時の現状を記録して残していくことが我々郷土の歴史に関心を寄せる者の役割であると考え、今後も未指定の文化遺産にも好奇心を持って調査と記録を続けていきたいと思います。

参考資料


・加賀中世城郭図面集（2017 年・佐伯哲也著・桂書房）
・歴史の道調査報告書第三集　加賀の道Ⅰ（1996 年・石川県教育委員会）
・柚木城と三ノ坂道　金沢市文化財紀要 123（1996 年・金沢市教育委員会）
・加賀一向一揆関連遺跡と古道調査報告書（2019 年・金沢市）
・医王山文化調査報告書　医王は語る（1993 年・富山県福光町・医王山文化調査委員会）
・金沢市画像オープンデータ（加賀国全図（「加越能三州細密絵図」）、加賀（「加越能三箇国絵図」正保４年写）、越中（「加越能三箇国絵図」正保４年写）、加州河北郡略絵図（「加越能十二郡図」）、砺波郡一町五厘略絵図（「加越能一町五厘略絵図」））
・射水市新湊博物館「高樹文庫」デジタルアーカイブ（「三州測量図籍　河北郡」、「三州測量図籍　砺波郡上」、「三州測量図籍　砺波郡下」）
・広報なんと vol.201　2021 年８月号　「歴史の道百選」朴坂越（殿様道）を歩いてみよう
・福光町史　上巻（2011 年・南砺市）